

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」

～生き生きと学ぶ子どもを育てる指導と評価のあり方～

体験や活動を通して学ぶ生活科において、教科の特性に応じた知識や技能を身につけさせるためには「育てたい力」を明確にしておくことが不可欠である。そして、そのねらいに基づいて子どもたちが表現した「主体的な学び」をどのように評価していくか、また育てたい力が確かに身についているかをきちんと見取る手段や方法を共有することが子どもたちの意欲向上につながり、より生き生きと学ぶ生活科が実践できると考える。

生活科教育部会では、具体的な評価規準の立て方やその見取り方についての研究・実践を進め、設定された評価規準が授業の中でどのように扱われているかについて検証していく。一人ひとりの学びをどのように評価していくかに視点を当て、子ども自身が進歩・成長したことを実感し、更に進歩・成長したいと思えるような、「意欲向上につながる評価のあり方」も探っていききたい。

I 研究の内容

1 実践紹介

日々の授業についての情報交換を行い授業実践に生かしていく。

生き生きと学ぶ子どもを育てる指導と評価のあり方を学び合う。

2 臨地研修

「自然観察の実践法を学ぶ」

愛宕山子どもの国でネイチャーゲームを体験した。

3 学習会

「授業力アップ研修会」 （講師 日下部小学校 高野育愛教諭）

4 研究授業

第2学年「いっしょにいと あんしん」

（授業者 加納岩小学校 柳澤晴子教諭）

家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たしたり、支えてくれる家族への感謝の気持ちをもったりすることができるようにすることをねらいとして取り組んだ授業実践である。

本時では、家族の一員として自分ができそうな仕事を考え実践した様子や分かったこと、思ったことを発表することができることをねらいとした。発表は、力

ード、実物投影機、実演、i p a dでの動画と様々な方法で行われた。発表の手助けとなる掲示物が工夫されており、児童は取り組んだ仕事の様子をスムーズに発表することができた。また、発表した児童に対して全員が「スマイルふせん」に感想等を書く時間を設定した。がんばりを友達にほめてもらったり認めてもらったりしたことで、どの児童も嬉しそうな表情を浮かべる姿が見られ、自己肯定感の高まりに結びつく内容だった。教師と子どもたちの日頃の温かい関わりが感じられる授業であった。本部会の研究テーマである評価については、一人ひとりの学びを様々な手段から教師がしっかり把握すること、授業後も継続して児童の様子や変容を見取っていくこと、特に人としての成長を評価していくことの大切さが確認された。

Ⅱ 成果と課題

1 成果

- ・実践紹介では、いろいろな単元の実践が出され、他校の実践が大変参考になった。自校や地域の実態に合わせ、ねらいをはっきりさせながら取り組むことの大切さが確認された。先生方が使っているワークシートなども見ることができ、何を使ってどのような視点で評価するのか、学び合うよい機会となった。
- ・臨地研修では演習的な体験活動ができ、大変有意義だった。実際に指導する私たちが子どもたちの立場になって見たり聞いたりして体験することは、大切だと改めて感じた。今回体験した「ネイチャービンゴ」は、学校や地域の特色に合わせ内容を工夫することで授業に生かせるものだった。これからも実体験を伴う学びの場を大切にしていきたい。
- ・授業力アップ研修会では、講師の先生に私達が敬遠しがちな飼育活動を中心とした実践紹介をしていただいた。教材観を明確に持ちながら教材研究をしている実践で、大変参考になった。生活科のおもしろさを教師自身が感じることができた。また、本部会の研究テーマである評価についても、評価の観点・方法・子どもたちの学びを見取る方法などが詳細に紹介されていて、大変参考になった。
- ・少人数ではあったが毎回の研究会の中味が深く互いに学び合うことができ良かった。

2 課題

- ・夏季学習会については、他の研修と重なり出席できない先生も数名いた。臨地研修を計画したが、部員数が少ないところさらに少人数での研修となってしまう、とても残念だった。
- ・授業について情報を持ち寄ったり検討する時間が十分に取れず、授業者の負担が大きくなってしまった。共同研究として授業を作り上げる時間をしっかり確保したい。

(部長 丸山 英子)